

問題イメージ例の分析から分かった、各教科で求められる力とその育成に向けて必要な指導の共通点、すなわちアクティブ・ラーニング（以下、A・L）を学校全体で行う上で必要なことは何か。高大接続システム改革会議に委員として参加した2人の公立高校校長に聞いた。

A・Lの本質を理解する場として全校体制での研修を

東京都立西高校 校長 宮本久也

「学力」とは、知識や技能、そして、それらを統合したり組み合わせたりする思考力や判断力、自分で学びを継続させていく力などをトータルに含む力だと言えます。その中で最も大切なのは、学びの意欲だと考えます。生徒に主体的な学習意欲を持続させることが、学力向上を図る上で何より重要であり、それがなければ受験学力も伸びないことは、多くの先生が実感しているはず

です。そうした学力を育むために、A・Lが推進されていることは周知の通りです。授業を変えなければならぬという共通理解は、本校でも急速に進んでおり、多くの教師が授業にA・Lを取り入れています。



みやもと・ひやま
教職歴37年。同校に赴任して5年目。東京都教育庁指導部指導企画課長等を経て、現職。

ただ、生徒が活発に活動しているように見えても、知識が定着していない授業もあります。「グループ学習」「A・L」ではありません。授業が上手な教師であれば、ただ座って聞いているだけのように見えても、生徒一人ひとりが深い思考活動をしており、誰もが発言したくなるような雰囲気醸成し出しています。A・Lの大事なポイントはどこか、こういった点に弱点があるのかといったことをしっかり理解した上で、授業に取り入れることが大切です。

効果的なA・Lを行うために、今後、より重要となるのが校内研修です。高校には学校全体で研修を行うといった風土が、小・中学校に比べてあまりありませんでした。しかし、そういった文化が学校に定着すれば、先生自体のポテンシャルは高いのですから、授業は大きく変わっていくのではないのでしょうか。

理論や経験に裏づけされた研修の枠組みを構築する

岡山県立和気閑谷高校 校長 香山真一

これからの授業で鍵となるのは、「活用」ではないでしょうか。習得した知識を活用すれば、その知識がはがれ落ちにくくなります。その最たる例が教師で、生徒に毎日教えているから、知識は深まり、はがれ落ちません。同様の状態に生徒をさせようというのが、A・Lのねらいだと思います。今後は、公式自体を証明する、自ら法則性を見いだして解答を導くなど、教科・科目の本質を深く理解することがより求められます。また、他者と協働する中で、新たな考え方や切り口が見つかることもあります。そうした学びの場としても、A・Lは有効です。



こうやま・しんいち
教職歴35年。同校に赴任して4年目。岡山県立岡山操山高校教諭等を経て、現職。

とだと考えます。それさえ担保できれば、教師が話す時間の多い授業でも、生徒の頭の中はアクティブになり、知識がはがれ落ちにくくなるのです。

そうした授業を行うためには、学力の3要素を分析的に捉え、それらの力を生徒につけるために効果的な指導や教材、声かけを、教師間で蓄積・共有することが大切です。その学びが本当に効果があったのかどうかを、学習者自らの言葉で語ってもらい、授業改善に反映するという手法も有効だと思います。理論や経験に裏づけられた研修の枠組みを構築し、教師全体の質を高めていくべきでしょう。

今やインターネット上に様々な授業の動画がアップされています。質の高い授業を視聴できる環境がありながら、それでもなおお学校に行き、受けたくなる授業とはどういうものか、教師一人ひとりが考えることが大切だと思います。